

明治村 だより

1999 Winter



冬号
Vol.18



目次

イスタンブール紀行	飯田喜四郎 …… 2
近代化遺産としてのドライブドッグ	西澤泰彦 …… 5
蔵書紹介 1	遠藤照子 …… 10
館蔵資料紹介(へ七)	安江由香 …… 11
天井中心飾り	……………
明治村の仕事 5 造園	……………
ミュージアムショップから	1 …… 13
冬の明治村	…………… 14

表紙写真「うなるの友」より龍の墓細工

「明治村だより」
第十九号発行のお知らせ
発行時期 平成十二年三月(予定)
申込方法 「明治村だより」第十九号ご希望の旨
及びご住所・お名前を明記の上、送料
一四〇円の切手とともに封書にてお
申し込み下さい。

平成十一年十二月十五日発行
「明治村だより」第十八号(平成十一年冬)
発行 博物館明治村
愛知県犬山市内山一番地
電話 〇五六八 六七〇三 四 千四八四 〇〇〇
ホームページ 〇http://www.meitetsu.co.jp/meiji-vil/
製作 大日本印刷株式会社

イスタンブール紀行

飯田喜四郎(当館 館長)

「一万五千名余りの痛ましい犠牲者を出したトルコ大地震の報道がやや静まった八月末に、イスタンブールへ赴いた。災害の影響で機内は例年になく空席が目立った。この旅行はイスタンブールにローマ時代に建設されたアギア・ソフィア大聖堂の実測調査のため、約十年前から始められたものである。調査は筑波大学芸術学系の日高教授を代表とするわが国の研究者とイスタンブール工科大学等の研究者との国際共同研究で、文部省の科学研究費補助金の交付を受けて行われている。

ローマ帝国は、西暦三百三十年に首都をイタリア半島のローマから小アジアのコンスタンティノポリス(現在のイスタンブール)へ移した。帝国はその後東西に二分して統治されるが、現在の西欧を含む西ローマ帝国は民族移動の奔流に吞まれて五世紀末に滅亡する。コンスタンティノポリスを首都とする東ローマは唯一のローマ帝国として、トルコに征服される一四五三年まで存続した。

現在のアギア・ソフィア(写真1)は新首都に五三七年に完成された三代目の大聖堂である。その中心にある身廊は三〇×七〇メートルの大広間で、四二メートルの高さから始まって五六メートルに達する直径三〇メートルのドームがその中央を覆い、一段下がってその前後を同径の半ドームが覆う。悠揚迫らぬこの大空間は、旧首都ローマに造られたパンテオン(一三五年完成)とならば



写真1

名建築で、キリスト教を国教とするローマ帝国の棟尾を飾るモニュメントである。

コンスタンティノポリスへ首都を移したローマ帝国は、一般にビザンティン帝国と呼ばれる。首都になる前にここにはギリシア人が開設した小都市ビザンティオンがあり、通称はこれに由来する。ビザンティン帝国は現在のアギア・ソフィアの完成後、九百年以上も存続する。それにもかかわらずこの大聖堂を「帝国の棟尾を飾る」とするのは、次の理由による。この大聖堂が完成してから百年もたたぬうちに、イスラムを信奉するアラブ人の軍団はアラビア半島を出て、エジプト、ヨルダン、パレスティナ、シリアをまたたくうちに席卷し、帝国の版図は小アジアとバルカン半島と南イタリアだけに縮小した。この版図も南下するスラブ人によってバルカン半島を蚕食され、小アジアはたえずアラブ人の掠奪にさらされて、地中海を内海とした昔日の国威をもはや回復することはない。アギア・ソフィアは、失った西ローマ帝国の版図の奪回をはかったユスティニアヌス帝(五二七～五六五)により再建された大聖堂で、規模の点でもデザインの間でも、それに注がれた技術力と経済力の点でも、十五世紀までのビザンティンに類例は全く見られない。

エーゲ海に通じるマルマラ海(写真2)と黒海に至るボスポラス海峡の接点にあるコンスタンテ

はかばかドームを含めてすべて煉瓦造である。西正面は大理石板を張られたが、それ以外はすべて煉瓦を露出していた。

この質素な外観とは対照的に堂内は床も壁も多彩な大理石で覆われ(写真3)、ドームを含めてすべての天井は透明ガラスの間に金箔を挟み込んだ金色のモザイクを下地としてその上に、赤・青・緑などのガラスモザイクで幾何学模様やクリスマ(キリストを意味する記号)を描き出した(写真4)。

堂内に注ぎ込む光は大理石やモザイクに反射するので、完成当初は建物自体が光を放つと評された。たぶん屋根の漏水によると考えられるが、半ドームと二階天井のモザイクはほとんど剥落し、味気ないペンキ塗りに変わったため、かつてのモザイクのきらめきは、一階側廊の天井でわずかに偲べるにすぎない。

西正面の女関廊(メソナ)の中央入口や西南出口の上、アプスの半ドームや南二階廊(ギャラリー)の壁面(写真5)などは、図像を用いた説話の美しいモザイクで飾られているが、堂内は広大なのでその存在は目立たない。

この屈指の名建築はビザンティン帝国滅亡後、内陣や調度を改装され、堂外にミナレット(礼拝を呼びかけるための塔)を増築されて、イスラムのアヤソフィア寺院になった。

中央の大ドームの下に信徒を集めるアギア・ソフィアの空間構成は、トルコ人が追求していた理想的なイスラム寺院の空間構成と同質であった。そこでイスタンブールではアヤソフィアをモデルとして、ドームを戴く中央の大広間を囲んでピラミッド状に空間を配列したスレイマニエ(一五五六年完成)やアハメディエ(一六一七年完成。ブルーモスク、写真2)のように、巨大な寺院が数多く建設された。

モザイクの説話やクリスマは、アギア・ソフィア大聖堂をイスラム寺院に転用する妨げになる。トルコ人はモザイクを破壊せず、その上に漆喰を塗って隠すだけとし、クリスマは少し変形するかそのまま放置した。当時すでに九百年も経過していたこの建物は老朽化が著しかったはずで、それを寺院として使い続けるには、技術的にも経済的にもきわめて大きな努力を払わねばならなかったに



写真2



写真3



写真4



写真5

イノポリスは、アジアとヨーロッパを結ぶ要衝だが、そこは小アジアを東西に走る地震帯の西端にあたる。現在のアギア・ソフィアは完成してから約二十年后に発生した地震により東側(内陣側)の半ドームと中央のドームの一部が崩落した。直ちに修理にかかり、崩落しなかった部分を含めて破損したドームをすべて撤去し、以前よりも六メートル高いドームを建造した(五六二年)。基本的にはこれが現在のドームである。

その後も、九世紀の地震で西側の半ドームが落下したとき、このドームも西側の三分の一が崩壊し、さらに十四世紀の地震で東側(内陣側)の半ドームが再び落下したとき、ドームの東側三分の一が崩壊して、それぞれ修理された。ドームや半ドームの修理や再建のほかに、補強のため西正面にはゴシックの飛梁を思わせる支壁が増築され、側面や背面にも巨大なバットレス(控壁)が増設された。

アギア・ソフィアではドームと半ドームを支持する大小各四基のピアは石造で、南北に聳え立つ四基の巨大なバットレスも下部は石造だが、その



写真6



写真7



写真8



写真9

ではない。十九世紀中期にスイスの建築家フォサ
ーティ兄弟に委嘱して実施した大規模な修理工事
もその一つである。

アギア・ソフィアはキリスト教の最高のモニュ
メントだが、イスラム寺院に転用されて調査でき
なかったため、近年までその建築については断片
的な情報しか得られなかった。

しかし五百年に近い寺院としての使命を終わり、
一九三五年から博物館として公開されたので、欧
米の研究者により調査が開始された。建築を含む
最初の本格的調査はハーバード大学によって行わ
れ、一九六五年には詳細な実測図面集が公開され、
一九八八年にはその構造を歴史的に検討した研究
書が刊行された。

完成以来すでに三回も地震によるドームの崩落
事故を経験したこの名建築を、将来の地震から守
ることは、現代の重要な課題である。そのため
の補強案の作成は、この調査の目標の一つだが、そ
れにはこの建物の構造や材料、過去の地震による
損傷とその修理や補強について詳しい情報が必要
とする。しかしながらこの建物は古代・中世につ
いてはもろろん、近世以降についてもこの情報に

乏しく、フォサーティがドームに取り付けた鉄製
のリングの位置さえ不明である。

このように近年のものを含めてこの建物の構造
に関する情報は不足するが、世界遺産に登録され
た国宝級の建物なので、大理石で仕上げられた壁
体や柱の内部の調査はもろろん、試料の採取もで
きない。このような状況なので、もし今回の地震
がこの建物に明瞭な影響を与えているとすれば、
それは補強案を検討するための有力な手懸りにな
ると思われる。一回だけだが、アギア・ソフィア
の二階廊（地表からの高さ一四メートル）で調査
中に、余震の揺れをはっきり感じた。イスタンブ
ールは震源から一〇〇キロメートル離れているが、
今回の地震ではかなりの揺れであったと思われる。
旧市街の北北西にあるエディルネ門はアギア・
ソフィアから約四、五キロメートル離れている。
この付近では今回の地震で五世紀の城壁が約一〇
メートルの長さで渡って崩壊した（写真6）。建設
当初の城壁は厚さ五メートル、高さ一一メートル
で、七〇から七五メートル間隔に造られた高さ約
一三メートルの塔によって防禦力を強化されてい
た。エディルネ門付近では城壁の市外側は近年部

分的に修復されたが（写真7）、市内側は放置され
て著しく老朽しており、崩壊したのも市内側であ
った。その露出した断面を見ると、城壁は内部ま
で粗石と煉瓦を交互に層状に積んでいることが分
かる（写真6）。

幹線道路が城壁を貫通するエディルネ門では、城
壁を強化する塔が道路の両側に一基ずつ屹立する
（写真8）。塔の地上部分は古代のように高い切石
層と低い煉瓦層とを交互に積む。近年復元された
ものだが、南側の塔は約九メートル以上の部分が
崩壊し、北塔には上下に大きな亀裂が発生してい
た。崩壊した南塔の断面をみると、モルタルで石
や煉瓦を結合しているのは表面から深さ四〇から
五〇センチメートルの外側だけで、内部について
は古代の工法は守られていない（写真9）。

この城壁以外には旧市街の建物に地震による大き
な被害は見当たらなかったが、アギア・ソフィア
では十四世紀の地震で発生したと考えられる壁体
の亀裂やパトレス内部の壁体の断層や変形など
を特に丁寧に観察した。しかし一部が露出してい
る岩盤上に建てられたアギア・ソフィアでは、地
震の影響を肉眼で認めることはできなかった。

近代化遺産としてのドライドック

ドライドックとは

博物館明治村は十一件の国指定重要文化財
を所有しているが、その中にはリング精紡機
（一八九三年イギリス・プラット社製）という
機械がある。これは、有形文化財の概念の広
がりの中で日本の近代化を示す構造物や機器
類が近代化遺産として、文化財の指定や登録
の対象となったことの現れである。その中身
は、上下水道施設、ダム、橋梁、護岸、ドラ
イドックといった規模の大きな土木構造物か
ら紡績機械などの機器類まで多様である。

この中でドライドックは奇妙な存在である。
ドライドックといってもイメージの湧かない
方もおられようが、現在では「陸地を掘り下
げて作業場を設けその入口に扉を設けて水位
を調節し船舶を修理または建造する施設」
〔土木用語辞典〕と定義されている。ところが
が、ドライドックは他の土木構造物に比べて
特殊な存在である。それは、一般に土木構造
物が公共事業で建設され、ごく一部に存在す

る私設水道や私道を除いて、施主が個人や私
企業であることはあり得ない。ところが、ド
ライドックの場合、商船用のものは民間の造
船所が建設しており、施主は私企業である。
土木構造物の建設形態としては、異端である。

加えて、造船業の不況にともなって、一九七
〇年代以降、ドライドックの建設がほとんど
なくなった。したがって、ドライドックは、
現在の土木工学の学問体系の中には組み込ま
れず、いわば忘れ去られた存在である。例え
ば、一九八〇年から刊行された『新体系土木
工学』（全二〇〇巻）にはドライドックの記述
はまったくない。

以下、足掛け十五年続けてきたドライドック
の研究（*）を記し、近代化遺産とし
てのドライドックの存在意義を論じてみたい。

ドライドック建設の歴史

日本におけるドライドック建設は、明治時
代に限って言えば、来日した外国人技術者に
よるドライドック建設の時期（導入期）、外国

西澤

泰彦

名古屋大学助教授、建築史・技術史
博物館明治村 建築委員

人技術者から知識と技術を学んだ日本人技術
者が試行錯誤を繰り返しながらドライドック
建設を進めた時期（定着期）、そして、日本の
土木技術の発展のなかで独自の建設を進めた
時期（発展期）に大別できる。

かつて日本にどのくらいの数のドライドック
が建設されたかは未だ不詳だが、明治時代に
に限れば、判明しているものだけで三三基に
のぼる（表1）。最古のドライドックは江戸幕
府がフランスの技術援助によって建設した横
須賀製鉄所第一号船渠である。このドライド
ックは、慶応三年（一八六七年）に起工し、
明治維新を経て、明治四年（一八七一年）に
竣工した。その設計は横須賀製鉄所首長とし
て全体計画を立案したヴェルニーとその配下
で実際に横須賀製鉄所内の多数の建造物を設
計した建築課長フロラン（兄）である。ヴェ
ルニーはここを日本海軍の拠点として、同時
に大中小三基のドライドックを計画した。第
一号船渠はその中規模のものとして最初に建
設された。その後、明治政府はここを横須賀

造船所と改称し、ヴェルニーの計画に沿って引き続き施設整備を進め、明治七年には小規模な第三号船渠が、明治十七年には大規模な第二号船渠（写真―1）がそれぞれ竣工した。これによって横須賀造船所は東アジアで唯一の三基のドライドックを持つ造船所、かつ、海軍基地となった。これらはいずれも現役の修船施設として使用されている。

これら横須賀造船所の三基のドライドック

と明治政府の工部省が建設した長崎造船所第一号船渠、神戸在住のアイランド系イギリス人実業家ハンターが日本人実業家とともに設立した大阪鉄工所の船渠の五基のドライドックが、前述の導入期に相当するものであり、いずれも外国人技術者によって設計された。しかもそのうちの四基はフランス人技術者によって設計され、また、彼らの下でドライドック建設の技術を学んだ日本人技術者がその

後のドライドックの建設に従事したことを考え合わせれば、ドライドックの建設技術はフランスからの導入であるといえる。

これらのドライドック建設が一段落すると、明治政府による海軍力増強と民間における海運業の伸張に伴ったドライドックの建設の第二段階が始まる。日清・日露戦争を見越した海軍力増強政策の下で呉、佐世保、舞鶴の各軍港に併設された海軍工廠がドライドックを

建設していくのが前者を象徴しており、横浜や神戸という国際貿易港に商船用のドライドックが新たに建設されるのが、後者の象徴である。この時期は外国人技術者に代わって日本人技術者がドライドックを設計していく時期でもあり、日本にドライドック建設の技術が定着していく時期である。

その代表的な技術者に恒川柳作がいる。彼は、幕末の横須賀製鉄所に設けられた「学舎」と呼ばれた専門学校で造船工学と土木工学を学んだ技術者で、その後、横須賀造船所第二号船渠の工事において設計者であったフランス人技師ジュエットの下で工事監督を務

めた。さらに、その経験を生かしてこの時期に建設された呉海軍工廠第一号船渠をはじめ、佐世保、横浜、浦賀、舞鶴と渡り歩いて合計六基のドライドックの設計あるいは工事監督を務めた。いわば、ドライドック建設に携わった日本人技術者の草分け的存在であった。

また、この時期はドライドックの規模が急速に巨大化した時期でもある。これは船舶の規模が急速に巨大化したのに呼応したもので、舞鶴海軍工廠第一号船渠のように全長二〇〇メートルを超えるドライドックも建設されるようになった。

そして、函館船渠（写真―2）を皮切りに

それ以後、明治末年までに竣工したドライドックが前述の発展期に属するものである。この時期の特徴は、新しい構造の採用、規模の巨大化、地方港での建設、造船用ドライドックに出現の四点があげられる。

構造については、それまでのドライドックが石造を主体構造としていたのに対して、函館船渠のようにコンクリートブロックを用いたり、横浜船渠第三号船渠のように全ての構造をコンクリート造とした新しい試みが行なわれるようになった。また、規模はより巨大化し、呉海軍工廠造船用船渠では全長が三〇〇メートルを超えた。このドライドックは、

造船と修船を兼用した日本最初のものであった。さらに、それまでのドライドックは、軍港の他は横浜、神戸、長崎といった国際貿易港とその周辺にしか建設されていなかったが、この時期になると瀬戸内海沿岸の因島や相生といった重要港湾には指定されない小規模な港湾にもドライドックが建設されるようになった。それでもドライドックの建設地が、神奈川県、瀬戸内海沿岸、長崎県に偏っていたことは明白である(図一)。

建設技術の工夫

さて、実際にドライドックを眺めると、「土木用語辞典」が示すように地面に穴を掘って入り口を扉で塞いだという単純な構造物に見える。しかし、その単純な機能を支える工夫は単純ではない。その工夫をドック建設の順序に合わせて紹介した。

まず、敷地の選定であるが、水辺であればどこでもよいというものではない。修船需要の見込みのある地が選ばれるのは当然だが、その他に重要な条件としては、地盤と気候に関する条件がある。小規模なドライドックなら軟弱地盤での建設も可能だが、全長一〇〇メートルを越えるドライドックになればその構造は石造であり、軟弱地盤では不同沈下を起こす可能性があるため、なるべく硬い地盤を持った敷地が選ばれる。一方、気候的条件

については、恒常的に風の吹く場所を選び、ドライドックの中心軸をその風向きに合わせてることが重要である。これは、船舶の入出庫時に船体に横風が当たるのを避け、また、入渠・排水後に船体が乾く時間を短くすることによって修船の作業効率を上げるためである。

次に構造と材料に関するところであるが、明治時代に建設されたドライドックの多くは石造である。ただし、その石材は、横須賀や横浜のドライドックでは、神奈川県真鶴を中心に出産される新小松石と呼ばれる安山岩系の石材を用いるのに対して、神戸や相生、瀬戸内海沿岸のドライドックでは花崗石(御影石)が用いられている。これは幕末までに既に確立していた石材供給と加工技術がそのまま反映したものである。コンクリート造が使われた最初のドライドックは、舞鶴海軍工廠第一号船渠だが、これは部分的な使用にとどまり、全体がコンクリート造になった最初のものは横浜船渠第三号船渠である。また、例外的な構造として函館船渠で用いられたコンクリートブロック造がある。これは、函館周辺での石材供給の困難な状況下で考案されたもので、通常の石材と同じ大きさのコンクリートブロックを作り、石材の代用とした(遠邑容吉「函館船渠築造工事ノ状況」)。

このような敷地の選定や構造と材料に関する工夫は、いわばドライドック建設の理論的

近代化遺産としてのドライドック

さて、ドライドックが近代化遺産のひとつに数えられる意味を論じてみよう。著名な土木学者広井勇は、彼の名著『築港』の中でドライドックを港湾施設には不可欠な修船施設の主要なものと位置付けている。ドライドックのない港湾は軍・民の用途を問わず、港湾としての成立要件を欠いているのであり、将来の発展が期待できないのである。ここに、ドライドックを近代化遺産と認識する意味が示されている。すなわち、港湾施設の整備は、富国強兵・殖産興業をスローガンにした明治政府の近代化政策の中で、軍にあつては海軍力増強、民にあつては造船業と海運業の伸張に大きな役割を果たし、その中核をなした施設の中心がドライドックであった。

海軍力の増強においては、横須賀・呉・佐世保・舞鶴の各海軍工廠が明治時代を通じて順次ドライドックを建設し、いずれも複数のドライドックを有したことにより艦船に対する修船能力は飛躍的増大した。修船能力の増大は、明治政府が、対中国(清国)、対ロシアを意識して行なった海軍力増強、すなわち艦船数を増大させることを根底から支えた。わかりやすい事例をあげれば、日露戦争における日本海海戦である。ロシア本国から遠征してきたバルチック艦隊は、遠洋航海の途中で艦船を修理する機会がほとんどなく、地球を

な部分であり、比較的容易に考えられ、実行されるものであるが、理論に対して実践、すなわち実際の建設工事は試行錯誤の連続で、予期せぬ失敗も多々あった。特に、軟弱地盤では、土庄による渠床の浮き上がりや渠床の不同沈下が起きる。埋立地に建設された函館船渠では、三尺間隔のグリッドに長さ二間から二間半の杭を打ち渠床の不同沈下を防いだ。

また、川崎造船所船渠の建設は文字通りの試行錯誤の連続で、砂地で海面下にあった渠口予定地の外側に締切堤防を築き排水を始めたところ、海底が浮き上がり堤防が崩壊した。そこで、堤防内の完全排水を諦め、先に海中に松杭一万本を打ち込み、海水を排水しながら真水を加えて徐々に水中塩分を薄め、水中にコンクリートを投下して厚さ二・七メートルのコンクリート層を造り、その上に御影石を据えて渠床を造った。この工法を考案した山崎鉦次郎は、その工法が高く評価されて工学博士の学位を授与され、さらに工事報告をアメリカの工学雑誌「Engineering News」に発表した。

このような施工技術の工夫は、ドライドックの設計や工事監督を務めた日本人技術者が工事を進めながら独自に考案したもので、それは日本においてドライドックの建設技術が確立したことを意味している。

このようにドライドックは明治時代の日本の近代化政策の根幹をなした富国強兵・殖産興業に深く関わった施設であり、近代化を如実に物語る施設である。現存するドライドックは近代化遺産の名に相応しい存在である。それらを考え合わせると、横浜船渠第二号船渠の重要文化財指定や川崎造船所船渠の文化財登録は実質的に得た評価である。特に後者は阪神大震災で被災したにもかかわらず、所有者(川崎重工業)が現役の施設として使い続ける意志を持ち、その一方でドライドックの歴史的な価値を自ら見いだして文化財登録を申請したのであり、近代化遺産に対する行政と所有者の姿勢に好例を提供したといえよう。そのほか、現存するドライドックの中には現役の修船施設として使われているものも多くあるが、それらを単なる文化財としての観点から近代化遺産と認識するだけではなく、産業構造の変化の中でさらなる活用方法を提案し、現役の産業施設として使用しながら新たな価値を付加することが必要であると私は考えている。

*本稿は、拙稿「明治時代に建設された日本のドライドックに関する研究」『土木史研究』第一九号、一九九九年五月、一四七～一五八頁、を基に新たな知見を加えている。

蔵書紹介

1

遠藤 照子(当館学芸員)

明治村の館蔵図書について、より詳しく知っていただくために、今号よりそのうちの幾つかをご紹介します。

今回は初代村長徳川夢声氏旧蔵書から、「大語園」(全十巻 昭和十年四月発行 巖谷小波・栄二編集)という書物について述べたいと思います。

この題名から推察すると、何か語彙辞典であるかのように思われますが、これは大人向けに書かれた御伽噺全集というべきものです。

巖谷小波(明治三年、昭和八年)は明治時代に活躍した有名な児童文学者で、多くの著書であらわした作家です。子供向けの本など殆どなかった時代に、夢と希望を与える本格的児童文学を確立した功績は大きいものがあります。創作童話の他に日本及び世界のお伽噺を集大成し、これらの物語は児童の必読書として定着しました。処女作である「こがね丸」(明治二十四年)は、こがね丸という犬が父を殺した虎と狐を討つという仇討ちもので、児童文学の嚆矢とされています。

小波は、幼少時代より古典・和歌・漢詩・俳句などの手ほどきを受けた影響で、和漢の古典に造詣が深く、子供ばかりでなく大人も楽しむ

る説話集をまとめたかと思いい立ち、弟子の木村小舟(明治十四年、昭和三十年、児童文学者)を実質的執筆者としてその編纂に着手しました。

こうして編集された「大語園」は、約三十年の歳月をかけ、九巻本文合計七千五百頁にもなる全集です。内容は、日本と、日本の説話類に多大な影響を及ぼしたインド・中国・朝鮮等に古くから伝わる神話・伝説・寓話を集めたもので、膨大な文献をもとに神・仏・社寺・怪異・奇跡・地理・動植物など二十五種類に分類し、五十音順に配列しています。いずれの項目も簡潔な文章でまとめており、ふと思いついた時に頁を開くと手短かに読めるような工夫がなされています。最後の第十巻は詳細な索引となっていて、分類別、引用書目、十八項目にわたる総索引という構成です。本来「語園」は、中国にある書物で啓蒙を目的として編集されたものです。この本に倣って上に大の字を付したとその序文で述べています。

引用された古今の文献は、古事記・日本書紀からはじまり、謡曲や今昔物語、古今著聞集・聴耳草紙・甲子夜話、各地の民話集などあらゆる関係書目から採集しています。編纂半ばにして小波は亡くなり、次男の栄二(明治四十二年

昭和四十四年、児童文学者)がその跡を引継いだもので、親子二代にわたる編集となりました。

当時ですでに昔話であった説話集で、俗信・迷信の類も多く含まれていますが、今日私たちが読むと全く聞いたことのないような話も収録されています。こうした書物をひもどくと、日常とは異なる世界へ迷い込むような不思議な印象さえ受けます。昔から言い伝えられている話というのは、様々な場面人間が生きていく上で心の拠り所となったり、教え導く指針となっていたりするものなのです。時にはこのように大人の御伽噺を読んでみるのも如何でしょうか。



館蔵資料紹介「七」 天井中心飾り

建物の見方、楽しみ方は人それぞれ異なっています。興味や好みの違いがあるので、これは当然のことですが、多くの人が同じ様に見過してしまいがちなものもあります。それが今回ご紹介する、「天井中心飾り」というものです。漆喰で作られたこの飾りは、天井にあるためにあまり注目されないようですが、見逃すには惜しい程の美しい飾りが作られていることが多いのです。

漆喰を扱う仕事は、江戸時代から左官職人が行ってきたものです。壁を平らに塗る、鏝絵と呼ばれる漆喰彫刻で土蔵の外壁を飾る、といった技術が培われてきました。明治時代になると、その手法を洋風建築の装飾を作るのに採り入れたのです。明治十八年(一八八五)に建てられた東山梨郡役所



写真1



写真2



写真3

の天井には、松竹梅、波に千鳥といった日本的な模様が描かれています(写真1)。三重県庁舎(明治十二年・一八七九)の中心飾りにも、古くから馴染みの深い桜の花を見ることが出来ます。明治の初めに作られた洋風建築の天井中心飾りには、和風の模様が多かったようです。これは、従来土蔵の壁に狐や鶴などの動物や風景を描いていた左官職人が、その技術と共に題材までも、そのまま西洋建築に採り入れたためです。明治初期といえ、建物自体がまだどこか日本的な匂いのする、和洋折衷や擬洋風が多かった頃です。装飾の模様が和風のものであっても違和感はなかったようです。技術的には、以前は壁や戸前に施していたものを、天井に付けるだけのことですから、おそらく簡単な仕事だったのだでしょう。

その後、時代と共に本格的な西洋建築が造られるようになると、そのデザインも植物(特にアカンサス)を图案化した洋風模様へと変化していきます。明治村では、安田銀行会津支店(明治四十年・一九〇七)(写真2)と内閣文庫(明治四十四年・一九一一)(写真3)に見られるものです。安田銀行の

内部は、伝統的な土蔵造りの外観からは想像の出来ない、洋風の空間が作り出されています。その雰囲気を生み出すのに最も効果を発揮しているのが、天井一面壁際にまで広がる、純白の鏝絵なのです。一方の内閣文庫では、板張りの天井の中心を空けて漆喰飾りを施した玄関ホールを始め、各部屋に様々な模様を中心飾りが作られています。これらの精緻な模様からは、既に西洋のデザインを完全に習得するに至った設計者の能力と共に、その要求に応えることの出来た左官職人の技術を窺うことが出来ます。

明治の初め、左官職は花形の技術として認められていたようです。というのも、当時洋風建築を造るには、お雇い外国人と呼ばれる人々の力に依るところが大きかったのですが、その建物を彼らが思うように飾ることが出来たのは、左官職人の技術があつてこそだったからです。この技術があつたから、西洋において石膏を使って室内を飾ったり、石を積んでアーチを作っていたのを、全て漆喰で表すことが出来たのです。彼らがいなければ、日本の洋風建築が違ったものになっていたのかもしれない。天井に付けられた飾りから、日本人の技の素晴らしさを窺うことが出来ました。やはり、見逃してはもったいない。

参考文献

- 白鳥金次郎「名工伊豆長八傳」 伊豆長八伝刊行会 昭和三十三年
- 長谷川堯「洋館装飾」 風山社 昭和五十二年
- 「JNA BOOKLET Vol.5 No.2 日本G壁」 JNAX 昭和六十年
- 「築蔵人間史」 ミサワホーム総合研究所 平成六年

安江 由香(当館学芸員)

明治村の仕事 5



今回は、明治村の裏方ともいえる造園の職場を紹介いたします。

明治村の敷地はざっと百万平方メートルですが、西は尾張富士、東は入鹿池にはさまれた傾斜のある丘陵地であるため、実際に入村者が見て歩ける地域はその三分の一ほどです。

その中で、建物周辺の樹木を中心として恒常的に面倒をみる植栽地域は約十五万平方メートルにのぼります。これを日常的に整備する造園の職場には現在四名が働いています。その一人近藤幹生さんに話を聞きました。

—明治村にはどのような樹木が多いですか。

主にマツ、コナラ、アベマキ、リョウブ、ソゴブ、ヒサカキなどですか。もともとこの土地は荒地でアカマツの林が広がっていたらしいです。今はマツもだんだん枯れてきています。

—造園では具体的にどのような仕事を行なっていますか。

造園の仕事は大きく分けて三つです。一つは村内苑路の植え込みの刈込作業です。植え込みを一定の高さに揃えて整えることを計画的に行なっています。もう一つは大きくなりすぎた樹木や枯れ木を伐採する作業でこれは木が軽くなる冬場に行ないます。今一つは日本庭園の管理です。ここは和洋折衷の明治



の庭として設計されたもので、入鹿池を借景とした自然をそのまま生かしたつくりになっています。現在この庭は茶会や野点の催しなどに使用されるため常に手入れを怠ることができません。あと芝生については業者に委託していますが、一部は我々が行ないます。どれも一日サイクルではなく本来長期計画に従って行なわなければならない仕事です。

—特に苦勞することはどのような点でしょうか。

植栽もただ刈り込めば良いというものではなく、常にお客様の目にさらされているわけですから、よりきれいに整えなければならぬので苦慮します。高い木に登るのがあまり得意でない点でこの点だけは困ります。また漆の木などにもよくかぶれるので大変な職場です。

—仕事中お客様から声をかけられますか。これ年配のお客様からよく声をかけられますね。これ

は何の木？という質問が一番多いですが、あとはこういう木はいつ剪定したら良いのか？と聞かれます。この点は当方の仕事の都合で行なっているのでも正しい剪定時期でない場合もあります。只、今は人員不足なので管理が行き届かない点が残念です。

—今後何か工夫したい点とかありますか。

とにかく現在の整備状態の水準を下げることなくずっと維持していくことが肝心だと思っています。只、今は人員不足なので管理が行き届かない点が残念です。

—今の仕事はずっと続けたいですか？

全く未経験で三年やってきましたが、ベテランの上司に少しでも追いつけるよう頑張ってます。この職場は季節毎にいろいろ変化があるって面白い仕事だと思ってます。

—どうもありがとうございました。



直接お客様に接する職場ではありませんが、明治村の環境を整備する重要な仕事です。野外博物館としては周囲の樹木も併せて一つの景観を形成しているといえます。植物も生きていますから手入れには気が抜けません。これからは明治村の緑を大切に守っていきたくて考えております。

「ミュージアムショップ」から

欧米の著名な博物館・美術館は、展示室の広さもさることながら併設されたミュージアムショップの規模の大きさにも眼を奪われます。さながらデパートのワンフロアがそっくり引越してきたかのようです。こうした状況は、その博物館の普及宣伝効果をより高める為の重要な一部門としてショップを設けるという基本理念に基づいていると思われれます。

それにひきかえわが国ではこのような考えはあまり取り入れられてなく、かつては博物館のお土産といってもせいぜい絵葉書程度しかありませんでした。

それでも欧米の影響か、今や何処の施設でも立派なショップコーナーを併設し、多くの種類の品物を扱って充実を図っています。それぞれの館の独自性を強調し、館蔵資料を元にしたデザインに拠る品物など、ここでしか入手できないというものがいわゆるオリジナルグッズです。博物館・美術館のさまざまな展示や催しなど知的好奇心を満たす要因の延長としてこれらのグッズが位置づけられるわけで、一般の商業店舗とは大きく異なるものです。

明治村も当初は正門入口にささやかな売店を付設していましたが、お客様の要望に応え年々規模を拡大し、一昨年にリニューアルしました。本年は北入口を開設しましたので、ここにも同様のコーナーを新設しました。

このミュージアムショップから明治村オリジナルグッズを幾つかご紹介したいと思います。

最初に文学に関するグッズとして開村当初の昭和40年から、村内で明治の文学者に縁のある展示建造物にちなみ、その著書の復刻本を制作しています(写真1)。それぞれの初版本の体裁を忠実に復元し、明治村版として当館でしか入手できない本です。

夏目漱石の「吾輩は猫である」(千八百円)、森鷗外の「文づかい」(七百元)、



写真1

の二種類あり、関連のものとして「我が輩は猫である」の表紙をデザインしたクリアファイル(二種類各二百五十円)、一筆箋(四百二十円)、鷗外の愛用品を復刻した啓紙刀(ペーパーナイフ)(五百円)などがあります。

写真2



また、昭和55年から作られているものに暖簾・手ぬぐいのシリーズがあります。明治村の展示建造物を描いて染め抜いたもので、染色家皆川泰蔵氏のデザインによるものです。取り上げている建造物は暖簾では森鷗外・夏目漱石住宅、西郷従道邸(写真2)の二種類、手ぬぐいでは聖ヨハネ教会堂、北里研究所、品川燈台、品川硝子製造所、聖サビエル天主堂、西郷従道邸の六種類です。いずれもその建物の特徴を良く生かしてデザインされており、額などに入れていただくと思えます。価格は暖簾七百元、手ぬぐい三百五十円となっています。ご来村の折は是非お立ち寄りください。

A Happy New Year

初 春

●新春 明治のものうり縁起市

日時；1月1日（祝）～1月3日（月）、
1月8日（土）～1月10日（祝）
場所；レンガ通り

●正月遊びめぐり（カルタ、羽根つきなど）

日時；1月1日（祝）～1月3日（月）
場所；帝国ホテル前広場

第四高等学校武術道場「無声堂」横広場ほか

●屠蘇・大福茶サービス／鏡割り

日時；1月1日（祝）
場所；レンガ通り

●書き初め

日時；1月2日（日）
会場；学習院長官舎

●日本各地の門松・しめ縄めぐり

日時；1月1日（祝）～1月10日（祝）
場所；村内の日本家屋

干支の「たつ」と縁起物

日時；1月1日（祝）～1月30日（日）
会場；東山梨郡役所

「ユーモアと話術ではい一句！夢声氏と俳句」

日時；12月26日（日）～1月30日（日）
会場；内閣文庫

入場特典

和服の女性の入村無料

1月1日（祝）～1月3日（月）、
1月8日（土）～1月10日（祝）

姓名に「龍・辰・竜」のつく方の入場無料（要証明）

1月1日（祝）～1月3日（月）、
1月8日（土）～1月10日（祝）

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。



●2000年カレンダー発売

価格；1000円（壁掛12枚・B3変形版）
ご希望の方は代金に送料（1部の場合
390円）を添えて現金書留にて
「博物館明治村カレンダー係」までお
申し込み下さい。

Merry Christmas

クリスマス

●クリスマス装飾

日時；12月11日（土）～12月26日（日）
場所；村内の洋館

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

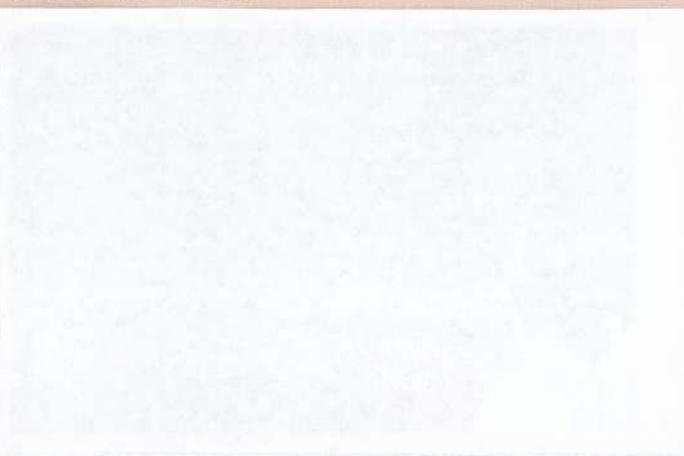
●クリスマスコンサート

日時；12月12日（日）
会場；聖ザビエル天主堂

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

●ハンドベルコンサート

出演；師勝はなの樹幼稚園
日時；12月19日（日）
出演；金城学院高等学校ハンドベルクワイア
日時；12月23日（祝）
会場；聖ザビエル天主堂



●第九コンサート

日時；12月26日（日）
会場；聖ザビエル天主堂

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

「吾輩ハ漱石デアル」

—千円札に描かれて15年—
会期；12月4日（土）～1月10日（祝）
会場；森鷗外・夏目漱石住宅

「青春をキネマに賭けて—夢声氏と映画」

会期；12月11日（土）～12月25日（土）
会場；内閣文庫



ほっ

とひと息

冬の明治村

平成11年12月11日（土）から
平成12年1月30日（日）まで
休村日 12月31日（金）
正月は元旦より開村